

光の子

発行／社会福祉法人 光の子どもの家
編集／光の子 編集委員会
〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
TEL／0480-72-3883
振替／東京3-128022
印刷／(株)ドモン企画

謹賀新年

光の子どもの家



お正月 みつよさんとお出かけ ふじぐみ みなもと まさし

小学生のころは無邪気に文部省唱歌などうたって、お正月を結構たのしんだものである。

中学生になって、新年の祝いに疑問をもつようになった。一体のうたなどに共鳴して、「めでたくもあり、めでたくもなし。」めでたくもなしの方に感じを強くした。

自然の運行によるとはいえ、所詮、人間が勝手に時を区切って、新しいだのめでたいだのといったみたところで、悠久の時の一点にどれほどの意義があるのかと、いやにつっぱった時期であった。

こんなことに開き直って議論するのは、まさに精神年齢の若さなのだろう。われわれの先祖たちは体験の中からいろいろと、生活の知恵を積みあげて社会的慣習や定めなどを作りなしてきた。

内実の伴わないものは変化し消えていった。

現に門松などはだんだん姿を消

新しい歌を主にむかつて歌う (詩篇 三三・三)

理事長 福島 勲

している。家康時代の戦捷記念の祝い方や、語呂合わせの縁起かつぎからの風習は、物価高や自然愛護の声の高まる中で、消滅を予儀なくされている。

意味を失ったものは消えていく、財政赤字削減に腐心している米国でも福祉の予算の削減はしないと大統領の意向である。一旦掘れば縮小できない福祉の業績である。わが国にあっても、もちろん福祉予算の削減は困る。そんなことがあつては私自身、直接影響を蒙るひとりであるが、痛む人が多いのは事実である。

竹下首相は福祉特別税は好ましくないという。予算の原則もあらうと思うが、方法はともあれ、必要な現実を無視することは許されない。

時代はどんどん進んでいる。人間の外と内とのバランスが失われつつある。新人類などというのは新しいブドウ酒なのか、それとも

新しい天と地

施設長 今関 公雄

古い皮袋が依然として古いのか、それとも枠の外れた、はみ出しの存在なのか。

ここでも問題は残る。車の運転のように流れに従ってだけ動いておれば、発明も進歩もない。

発明や発見にプロセスはあるがこれらは突然の変異である。これに対応できる新しさが求められる。聖書の中でいう人間の新しさは回心ということを経験せずしては語れない。「人は新に生れなければ神の国を見ることはできない」

この新しさは霊的突然の変異である。パウロの回心もアウグスチヌスの回心も劇的であり、人の思いを越えたものである。孔子のような詩に興り礼に立ち、楽に成る人格完成ではない。反逆者、放蕩者（山田昌教授はアウグスチヌスも放蕩者とは言わない）が神によって完成される新しさである。

これを経験する者が、新しい歌をもって神を讃美する。

新しい歌とは必ずしも新曲、新作の歌詩というのでなく、回心を喜ぶ者の真心からの歌である。

新年おめでとうございます。皆様の本年の歩みの上に神様の豊かな祝福を心よりお祈りいたします。

お陰様で光の子どもの家の歩みも、皆様のお支えのうちに三度目の新年を迎えました。子どもたち二十八名と職員一七名が元気で新春を迎えましたことを感謝してご報告申し上げます。

さてご承知の通り施設開設に際しては、行き違いや誤解、さらには悪質な妨害などにより、いわば町をあげての反対運動が展開されました。当時、当事者としては福祉施設への猛反対に、戸惑うとともに憤りも覚えたものでした。

しかし、当地での子どもたちの歩みの「事実」を仲立ちとして、地元の皆様も本来の善意と思いやりを回復され、共々少しずつ前進しつつある実感を持たれる感慨を新たにされる昨今であります。

昨秋、光の子どもの家の第三回感謝の集いは、地元の皆様などを

初め百名をはるかに超えるご支援下さる人々のご参集で盛会でした。園庭での立食パーティも、終始三年目の和やかさに満ちたものとなり、ご来賓のご祝辞も、これまでのわだかまりを乗り越えた前向きで明るい調子で彩られていました。

その中で、あの反対運動の渦中で重きを為した町行政とPTAの要職者のお祝辞は劇的な一コマとなりました。施設開設反対運動のあるべきでなかったことを陳謝され、今後の施設への全面的なご支援を約束されるという、真情に溢れ、全参会者の胸をつつ感動的な挨拶になりました。ひととき盛大な拍手がしばらく鳴りつづけ、これまでの経緯が思いおこされ、固い握手を交わしながら思わず目頭が熱くなりました。この時「新しい天と地」を望み見た思いに包まれました。

光の子どもの家の存在は、この地にとって負担が予想される重い

感じを起させるものでしょう。違和感の存在は否定できず今後も引きずるだろうと思われれます。一方この地の伝統的な文化や教育に、ある種の刺激になりうる可能性があるとおもわれます。「共に生きともに育つ」拠点としての福祉施設は、周辺地域の変容と成長に寄与し、「新天地」を創造する契機を持っていると考えられます。

「わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、人の目から涙を全くぬぐいとして下さる。もはや死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のものが、すでに過ぎ去ったからである。見よ、わたしはすべてのものを新たにします」

（ヨハネの黙示録21・1-5）

この年も、聖書の示す約束を望み見るものであり続けたいと心より願います。

良寛と三人の道楽息子

② 木村周蔵の話

松本 市壽（良寛研究家）

足かけ三十年も住んだ国上山において、良寛が島崎の能登屋木村家の裏屋に移った時期は、良寛が六十九歳の年で、正確には文政九年（一八二六）の晩秋でした。翌年夏には貞心尼がここを訪れ、劇的な会見をするのです。

この能登屋こと木村元右衛門は熱烈な浄土真宗の篤信家であり、先祖は北陸加賀（石川県）の一向一揆の戦火をのがれ静穏の地を求めて、菩提寺の隆泉寺とともに現在のの地、新潟県三島郡和島村島崎に移ってきました。能登の一向一揆の頃から各地を転々として島崎に辿りついたのは慶長五年（一六〇〇）頃と伝えられています。

もともと木村家は代々より勤儉な家風でもあり、良寛を敬慕し晩年の身の周りの世話をしたいと申し出たのは木村家の第十一代元右衛門ですが、その頃には家業も栄え相応の資産家としての名望を備えるほどになっていたようです。

現在でも隆泉寺境内の正面左手に木村家が寄進した経蔵があり、その中には黄檗版大蔵経、全部六千七百七十一巻、二百七十五帙が収められています。宗祖親鸞は、お経も寺院も伽藍も否定したのではあったが、中興の祖師蓮如はその折衷方式を案出して法燈が絶えないような寺院経営を説いています。元右衛門が大蔵経の寄進をしたことは、信仰の厚いこと勿論であるが、それだけの財力を保有していたことを示しているのです。

良寛の生まれた出雲崎橋屋は菩提寺が真言宗円明院、出家得度したのは曹洞宗光照寺です。国上山の国上寺はじめ宝珠院・本学院や寺泊の照明寺など、仮住したのはみな真言宗の寺院であるのに、浄土真宗の信徒の家に引きとられたというのも面白いのですが、島崎の床屋長造からは「良寛さんのは雑炊宗」とからかわれてもいたのです。

これは良寛が能登屋に移る前の話です。木村周蔵は元右衛門の息子で、のちに第十二代元右衛門を襲名しますが、いわば能登屋が良寛の時期のボンボンで親の不興を買ったことがありますが、放蕩か酒乱か、何が原因だったかは判りません。十一代元右衛門は謹厳実直な父親であつたようで、後継ぎの息子には夢もあり理想の親孝行息子という期待もあったのでしよう。思い余って周蔵を勘当してしまつた。周蔵は母親の実家である隣村の大矢六郎左衛門の家へ転がり込んで居候をきめます。

勘当はしたものの、早く悔い改めて帰ってきてほしいのは親心というもので、元右衛門はその気持ちを良寛に相談したのです。そこで良寛は周蔵に手紙を書いた。これは現在も木村家に遺っています。

「此度、貴様かんだうの事二付、あたりのものどもいろいろわびいたし候へども、なか／＼承知無之候。私も参りかゝり候故ともなくにわびいたし候へバかんだうゆるすことに相なり候。早速御帰候而可然候。さて、御帰被遊候て後ハ

ふつがうの事なきよふに御たしなみ可被遊候。第一あさおき親の心にそむかぬ事、し事も手の及たけつとめて可被遊候。其外の事も御心づけ可被遊候。かさねていかよふな事でき候とも、わびことハかなはず候間、さよふにおぼしめし可被成候。以上」

ここには、勘当が解けるまでに周囲の者が取りなした経過がややオーバーぎみなゼスチュアで書かれています。勘当が解けたから帰って来てもよい、帰ったなら第一に朝寝坊は絶対にダメ、よく働くこと、言いわけをしななければならぬというような心得をしでかしても佗び事は一切ダメと承知してくれというところが、論すような口調で諄々と書いてあります。

さて、周蔵は帰って来た。その朝、良寛は木村家の玄関の戸を内側から押さえていたが、周蔵は勝手口から入って朝餉の膳に向かっていた。良寛がふり返って見ると周蔵は朝飯を食っている。そこで良寛の驚きようといったらない。大声で笑いながら、黙って国上山へと帰って行ったそうです。

街角からの風のたより

No.5

杉の子保育園園長 星野 勤

児童福祉法が施行されてから40年経った。つい先日、それを記念する集会に参加したが、予想以上にささやかなものだった。民間保育園の関係者中心の集いであつたといふことによるものかもしれない。きっと他の団体や行政官庁の主催する集いもあるのだろうが、私たちのところにはまだ情報すら届いてこない。もちろん10年単位で何かを記念すること自体にさほどの意味があるわけではないし、記念行事の多さなどが何かの豊かさの表現であるという保障もない。けれどここ数年前から顕著になってきた、社会福祉全般への行政側からの揺さぶり再編の動きが、結局は自助努力の強制と「買う福祉」路線化の突出という形で私たちの目前に迫ってきている。今この時ということを考えるとあの集いのささやかさはやはり肌寒いものを感じる。

保育園というところに限って考

の行政改革路線のローラーにつぶされるように停滞してしまつた。自治体独自で上乗せする程の余裕があるのなら、国の補助金をその分減らすというおどしに屈したからだ。

この国の行政の中で、真に家庭や家族が大事にされ豊かになるよう支えていく施策がなされたことなどなかったと思う。いつもそれは利用されおだてられ、そして収奪され続けてきた。高度成長期を農村からの季節労働者労働者家庭然り、今また男並みに子どものことなど忘れたように働くキャリアウーマンかパートのおばさんかという形を強いられる女性労働者とその家庭然り。男の育児時間を自治体で初めて制度化した田無市役所職員のある父親は数日母親の代わりにとつた育児時間のためにあの「フォーカス」に追い回された。働く女性が、就職と昇進の機会を男と平等に保障されるという法律を成立させるために労基法のなかから「生休」をかかげるなどという指導がなされた。

働き続ける女性は家庭や子ども

のことは忘れるという「男並み」が強いられ、子どもが気になる母親はM字型の生活パターンしか選べない。夫が気がねなく家のことなど忘れ去って働けるようよい妻になるべく強いられる。そうでなければ暮らしが立たない。

更にいざ保育園に入所しても高い保育料負担（＝買う福祉）だ。貧困家庭は自助努力の原則によって働かざるを得ずその場合は保育料は安い。貧困という理由以外で働くこと＝保育園入所を選ぶ家族には高負担が当然だとされる。もちろん父母とも長時間労働＝保育となる。実質的には益々空洞化しながら幻想の内でのみ肥大していく「家庭・家族」。それらのツケはひとまずは保育園や子どもの上に集中して現れる。モレツ社員とその家庭（専業主婦や子ども）との間に生じている。これら浮遊する家族という現実には例えば養護施設の実践の上にも重要なテーマを提示していると思えるが、この共通項としての「家族」については次の機会に再度考える。

光の子らしく

10

山崎 まり子

新年明けまして、おめでとうございます。昨年中は、たくさんさんの暖かいお心遣いを頂き、ありがとうございました。この一年もどうぞよろしく願います。

皆様の御健康をお祈り申し上げます。

さは、前の担当者には寄りつきもしない行動を自分で取りました。そして、移行などあって欲しくないことへの不満や葛藤を、私への抱っこや赤ちゃん返りで表現したのです。明けても暮れても「抱っこ」どこへ行くにも「抱っこ」こうならなければ、ことの重大さに気づかない私は施設保育失格！もう寝ようとしていたある夜、急に「理可ちゃんは今？」と前の担当保育の名を口にしました。「下にいるよ」「理可ちゃんに会いたいのよ」「行っておいで」大きく頷いた理可ちゃんは階段を下りて行きました。戻って来た時の理可ちゃん

んも「理可ちゃん、ぬり絵する？」と誘えるお姉さんになりました。理可ちゃんが二階に来そうな気配を感じた加津子ちゃんは、しなくなつたおねしょを毎晩するようになつたのですが、もうすっかりなくなつて理可ちゃんの無邪気な笑顔についていき込まれ、これまた格別の笑顔を見せるようになりました。

私の大きな過ちについては、これからとりくみの糧にし、更に深く考えていかなければならないと思つています。子どもたちの、成長のためのエネルギーを潰さないように、今よりもっと子ども

二階にもう一人仲間が加わり、間もなく一カ月が過ぎようとしています。「もう一人加わった」といっても、仙道家の子どもは、変わらず十人です。その仲間とは、今まで、同じ仙道家の一階の一間で、他の保育が一对一で大切に關わってきた理可ちゃんです。

理可ちゃんは、ここにきて初めて關わった保育がやむなく退職してしまい、人間関係の核を創るためこの一年余り一対一で職員が關わってきたのです。

けれども、子どもは独りでは社会性がとくに育ちにくいことを証明するような理可ちゃんの立居振る

そのことを反省し、仲間からも指摘され、この移行によって理可ちゃんへの負担をできるだけ取り除くために、前の担当者や家の仲間と話し合い、半年はかかるだろうと、急がずに対応し、配慮を怠らないようにして来ました。

しかし、理可ちゃん特有の勘のよ

まだまだ寒い季節が続きます。大好きな水遊びは自分我慢だね、理可ちゃん。



育

つ

その3

竹花 信恵

明けましておめでとございませう。昨年はお母さんの皆様の心をお寄せ下さり、力強くお支えいただきありがとうございました。

入所第一号を受け入れた私たち原田家も、この二年半の間に五人がお家に帰り、現在、再び定員の十人の子どもたちが、新しいお友だちを三週間前に二階グループに迎えて、手をつなぎ直したところ。ずっと前から知っていたような・そんな気になさしてくる。△出会い△と、前に向けて、願いを込めて、精いっぱい押し出した△別れ△と、とっても大変な場面に、何かを決定してしまつような厳粛な場面に立ち合わせるを得ない日々が積み重なりました。此の家の大先輩紅子ちゃん、三才児だったのに、もう小学校入学目前です。おんぶして寝かしつけていた将志君は、幼い子にロボットを造ってあげられるお兄さんになりました。子どもたちに△小さい頃

の△話しができるようになりつある今日この頃です。のびのび成長できるよう願っています。

落ち葉が風に舞う中、チューリップの球根を植えました。「それ何? おいも?」「違つよ、クリだよね」とちいさな小さな△チューリップ△に幼い子どもたちの頭が寄り合いました。家の窓から顔を出していた甥ちゃんも、運動靴をアベコベにいて飛び出してきました。「春になったらチューリップが咲くよ」「わぁ! はるになつたら? はるになつたらようちえんにいよう」と毎日のようにくり返す会話が始まります。「春になったら」ね、チューリップの花が咲いたら幼稚園ね」「春になったら」が甥ちゃんと私の合言葉になりました。会話が成り立たないもどかしさに、外国へ行つたらこんな感じかな、など思っていた三ヶ月前です。しかし、それは甥ちゃんにとってどれだけ大変なこ

とだったでしょう。この短い期間に、できることが誰よりも増えた頭張りやさんです。私ができるようになったことの何があるでしょう。クリスマスを迎える準備が始まった日曜日の朝、玄関に、桜の枝と赤いリボンで作ったリースがかざられました。まっ先に見つけた甥ちゃんは「あれ! なんだろう」とつぶやきました。「神さまが作ってくれたかな? 神さまの赤ちゃんがね・」へたな訳の分からない説明をじっと聞いていました。そして今度は、△神さまの赤ちゃん△が甥ちゃんとの合言葉。

何だか分からないけれど、本当に何も分かっていないのだけれど、△神さまの赤ちゃん△が忘れられない甥ちゃんになりました。

この家でやっと二才を迎えたばかりの讀ちゃん。甥ちゃんの妹です。微笑みが顔から溢れそうです。おとなしくしている時、あまりないのですが、その時が一番安心できる時、というわけにはいきません。張りたての障子にボールペンでポツポツポツ、お友だちのクレヨンにはみんな紙を剥き、テーブル

には得意のマルをマジックで・。眠る時、当然というように私の布団の、それもまん中に寝て、端の方へ移動させられる毎晩です。自分の布団はただ敷いてあるだけ。毛布カバーやタオルの端をお母さんのオッパイ代わりに手で持って指を吸いながら夢の世界へ。赤ちゃんからやり直して、やり残したことをみんなして、確実に自分の土台を確かめながら大きくなってほしい、それができる子、可能な子はどれだけのいるでしょうか。あまりにも与えられることの少なかつた子どもたちです。讀ちゃん、どんな夢を見ているのでしょうか。

大人になって思い出す△子ども時代△が、そして、見る夢が、少しでも豊かでありまうように。今年もどうぞよろしくお願い致します。



養護メモ 14

新しさと

菅原 哲男

養護施設光の子どもの家は、家庭に何らかの事情があって、家族と共に暮らすことが出来なくなつた子どもたちと、両親や家族の溢れるような愛のなかで育てられた職員たちが、その厳しい状況の相違をつき合わせ、もう一つの新しく暮らし合う状況を創り上げるために建てられた。

人が胎内でも安んじてばかりはいられないようになってきた。胎内で、障害の有無や男女の別などが分かり、胎児の治療も進んでいるという。人は白紙のような状態で生まれてくるというこれまでの常識が、医学や心理学などの科学によって否定され続けている。特にその人の人格形成に決定的な影響を持つ、母子関係の基本的なものは既に胎内でつくられ始めているという。科学の進歩や発展は、我々の常識的なことから時には補強し、時には覆す。生命の発生は身体と同時に、魂の成長も始め

ていたという新しい神秘。

養護施設光のこどもの家の建物は外観すると随分暗いのではないかとと思われるが、中に入るととても明るい、結構明るい。しかし、頭からキンキン照らす明るさではない。日本家屋である子ども家の蛍光灯は使われていない。人が安心して寛げる明るさの基準を茶室の△暗さ△に求めた。勿論茶室よりはるかに明るい。頭上からの光は抑え、窓や斜め横の明かりやフロアスタンドなどの補助照明を使用している。子どもの生活空間には光の濃淡があり、ミステリアスな部分が必要だと考えた。

科学や合理的な考えなどが生活の中から神秘的なものを排除してきた。その恩恵も充分受けているが、失った大切なものも随分ある。子どもたちの、夜に仏間を通らずトイレに行く工夫をしたことや、大晦日まで家の隅々まですっかり掃除して、父と一緒に神だに

頭を垂れた元旦の淑気を、クリスマスチャンのはしくれとなった今も懐かしく思い出すのである。何か分からないが、うす気味悪い、触れてはいけない、ミステリアスな存在が日本のお家にはあった。それらが想像力を刺激し、情緒などを育ててきたのである。

クリスマスの準備に入るアドベントの徴であるクランツやリースをつくるために縦の枝を遠く箱根の方まで採りにいく。クランツに毎週ローソクを一本づつふやしながらかクリスマス準備を子どもたちとしていくのである。例えば、第一アドベントには部屋を飾る星を一つ、第二アドベントには二つ・・・というふうにして皆で飾りつけながら準備を進める。このクランツ作りから子どもと一緒にして皆でつくるクリスマスにしようという提案があった。これには相当の説得力があり、激論になった。クリスマスは宗教行事である。宗教にはミステリアスな何ともしがたい内容がある。

担当者、できるだけ手作りで準備したものを、昨年は丹羽倫己

が、今年は田中郁夫がサンタクロースに扮装して、寝静まった子どもたちにプレゼンする。半ば目を開けてプレゼンを手にし、ウツトリした顔は、一年に只一回のいい顔である。これを事実だからと明かしてしまつたらミもフタもない。丹羽と野崎毅は11月27日の夜から出かけて縦の枝を採り、29日の午前2時までかかってリースやクランツを飾りつけ、朝、子どもたちの目を見張らせた。

養護施設光のこどもの家の事業計画に宗教的情懐の涵養を第一に掲げている。お月さまの鬼の餅つきを信じる子どもは、もういない。それはそれとしていいだろう。しかし、人の思いや力を超えた存在と、生きている意味について悩み考える期を、もう一度、子どもたちに取り返すことの△新しさ△を試みていきたいのである。

光の子どもの家の設立とこれまでの過程のなかで、私たちの思いや力の及ばない△ある意志△の存在を思わされた。多くのお祈りとご支援を心から感謝しながら、この年も新しく歩み出します。

日誌抄

十月十六日
十二月十五日

十月十九日 栗橋町の竹林様より

おいしい漬物を頂く。感謝。

二二日 感謝の集いのための椅子やテーブル用にする、使用済のコード・ドラムを東京電力久喜支店より沢山頂く。感謝。

二八日 栗原造園、園庭の整地・植木の手入れ奉仕。感謝。

十一月一日 熊谷の井上利夫氏建具、壁などのペンキ塗装のご奉仕。さわやかな生活空間が。

三日 第三回感謝の集い挙行。

前日から降り続いていた雨が十時頃には上がって、園庭でのパーティの準備 青木正久衆議院議員が時間の都合でと早々と丁寧なご挨拶。栗原防衛庁長官のメッセーじも。十二時。感謝礼拝が福島理事長の司式によって捧げられる。激しい反対運動の吹き荒れる開設以前から、子どもたちの心がすさんではと、園庭の植栽・整備のご奉仕を続けられた栗原造園社長様への感謝状贈呈も。礼拝会場に入り切れない参加者も入口に大勢。

一時。園庭で感謝パーティ。加須中田病院院長のご挨拶に始まり、秋山県議会議員、江森町長、栗原町会議長のご挨拶。関根同仁学院長の乾杯。力強いご支援のキリスト教会関係者代表の東大宮教会仲矢長老のご挨拶など。日頃お世話になる地元の方々、懐かしい顔、嬉しい顔、笑顔。この日のハイライトは柿沼前町助役、谷口前原道小学校PTA会長の消極的、積極的開設反対運動への関わりについての陳謝と今後のご協力の宣言。全参加者の胸を打ち、涙を見せる人も。暫くは嵐のような拍手止まず。柿沼氏の後援会設立と会長就任の約束も。橋本興業の店出でわたあめ、ヨーヨーなどを頂いた子どもたち、職員、ボランティア等総勢二六〇名余が陽を急ぎ立てる夕風がたち暮れなずむ頃まで。六日 大利根町商工会よりSLの模型のご寄贈。感謝。

一二日 大塚房子、元和郵便局長来訪。柿沼山。ありがとう。

一三日 クリスマス委員会発足。

一四日 栗橋町「ピエロ」より沢山の美味しいパンを、いつも。

一六日 江森理容店の調髪奉仕。

一七日 国際婦人福祉協会より一三名来訪してお励ましを。感謝。

二九日 小林君が参加している大利根剣友会の手打ち蕎麦会。第一アドベント。各家の玄関にリース、食堂に大きなクララント。三十日 M・Sちゃん(五才)入所。原田家池田担当。

十二月六日 第二アドベント。礼拝と夕食の後柿生北教会の方々によるハーブの夕べ。

七日 埼玉地区C・S大会の献金が届けられる。感謝。

・この日から家庭訪問開始。子どもたちが家族と一緒に正月がてきるよう祈りながら。

十一日 所沢児童相談所より、毛利、大倉福祉司が来訪。家族の情報交換と今後の見通しを検討

十三日 第三アドベント。丹羽倫己のベープサートによる礼拝

今年の集大成。大好評。

・この頃から年末の期間やご支援が連日。本当に感謝の日々。

謹賀新年。本年も励みますのでよろしくお願い致します(くら)

反射光

あけましておめで
とつごいいます。

これまでのご支援

とお励ましに感謝致します。本紙

も四千部の発行となります編集子

一同感謝して内容を再点検し実り

多い年にする決意ですよろしくお

願致します☆独り闘い生きる子ど

もたちの家族への思いの烈しさに

胸突かれ、家庭訪問の度に十のカ

ードの稀な少なさに胸塞がります

子どもたちに多くの応援団の必要

も痛く思います。その中心に家族

を位置づける働きを更に続けます

プライバシーを守りその報告もと

考えます☆施設運営の最低基準に

よって費用が国・県から支払われ

ます。子どもたちの要求にはとて

も応じ切れない最低基準です。こ

れを使い切れない施設が多く、国

は通達を出して剰余金の処理を指

示しました。施設活動の末期的状

況と一方で国や県に予算対策活動

を展開する矛盾です☆枯れ切った

園庭の植え込みの枯葉を持ち上げ

て踏の裏が二つ恥かし気に顔を出

し始めました。今年も励みます。

乞う、更なるご支援!

(哲)